

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第9回

探検の原点

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)



イラスト=安成 晶

この連載は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。当時、京都大学探検部に所属する学生であった私は、仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年によく実現した。帰国後、私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた。内容は、探検の思い立ちから帰国まで、私たちは何をやり、何を見聞きし、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものであるが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、眠り続けることになってしまった。今回、1960年代末の学生による「探検」の記録として、ほとんどそのまま『科学』に、十数回に分割して掲載していたくことになった。

前回(第8回, 11月号)は、中島暢太郎隊長以下全員(6名)で氷河に日帰り予定で上がり、美しい氷の世界を堪能するが、帰途、夜の湖をゴムボートで横断中、大嵐に遭い、転覆寸前で湖岸キャンプにたどり着いたことや、湖から海岸までゴムボートでの川下りの醍醐味などについて報告した。今回は氷河上に生きる水生昆虫の「発見」や氷河湖周辺での動植物の観察、氷河湖の湖面振動の観測などを通して、私たちがめざしていた探検の原点は何だったか、再確認したことを記している。また、このようなへき地での探検をやるためには、食糧などの確保も非常に重要であるが、ここにきて露呈した私たちの食糧計画の問題にも触れる。

行きはよいよい、……

1月21日。20時間降りつづいた雨も、午後には止んだ。晴れ間も見えてきた。濡れた寝袋、エアーマットを外に出すと、みるみるうちに乾いてくる。

午後から、全員で、ボート着岸地に残した荷物を取りに行く。が、装備係としてのぼくは、湖岸キャンプに忘れ物を思い出した。ロウソク、サイフォン、ポリ袋、メタ(携帯固形燃料)などといった、細かいものばかりだが、やはり、ないと、えらく困るのだ。どうも、安成装備係は、ミスが

目だつ。プエルトエデンで装備を支分けた時にも、細々とした忘れ物をやらかした。例えば、五寸クギ、これを忘れたため、小屋づくりは、すべてロープに頼らざるをえなかった。また、トランシットを危うく忘れるところだった。これを忘れたら、流動観測も、測量もパーだ。エデンくんたりへ、取りに帰ることも、一方通信のため、エデンから持ってきてもらうこともできない。が、この氷河キャンプから湖岸キャンプへは、取りに帰ることができる。ばからしいことだが、伊藤とぼくで行こうということになった。

ゴムボートが、湖岸キャンプに近づく頃から、



追い風が強くなった。着いたとたん、ゴムボートが風でひっくり返された。行きが追い風ということは、帰りは逆風だ。昼食にジャガイモをゆでて食っているうち、風と波は、さらに強くなった。空は晴れている。これは弱った。2,3回、2人で、風と波に逆らって乗り出したが、すぐ岸に打ち上げられてしまう。今日中にキャンプに戻らないと、明日の行動に支障をきたす。そんなことより、氷河上の3人が、心配しているに違いない。早く連絡せねば。

トランシーバーで、再三呼ぶ。パーティーが分かれて、双方に何かあった、あるいは、何かあった、と感じた場合には、毎時の0分と30分に、トランシーバーのスイッチを入れる、という約束を、全員で決めていたからだ。が、応答はない。氷河の上は、日があたって、ギラギラ輝いている。気ばかりあせるが、どうしようもない。ゴムボートを使わねば、氷河へ上れないことは、調査の上で、大きなハンディになっている。しかも、具合の悪いことに、氷河上のキャンプと、湖岸キャンプは、間の湖につき出た部分によって、見えない。

やがて、夜になった。ぼくたちが、湖で遭難していないことを伝えるために、懐中電灯を持って、湖岸ぞいに、氷河キャンプが見えるところまで行くことにした。少し行きかけた時、明るい一条の光が、湖につき出た岬から走った。やっぱり、かれらも心配して、ボートの着岸地から、苦勞して湖岸キャンプの見える地点までやってきたのだ。安心させようと、必死になって、懐中電灯を振る。むこうも、しばらくライトで輪をかいて、スッと消えた。安心したのだろう。午後10時。やっと、トランシーバーが通じた。「君たちは、何をしてくるんですか」と、また、例の口調の寺本巖副隊長。今夜は、小屋で泊り、明朝早く、風が弱くなるのを見計らって帰ることになった。まったく、装備係のちょっとしたミス、ロウソク2,3本のおかげで、とんだ迷惑をかけてしまった。

「小屋で寒くはないですか。着るものは、じゅうぶんありますか。シラフはありますか」と寺本氏。ふだんは、細かいことをくどくどと、とうけ取りがちな寺本氏のことばも、今度ばかりは、しみじみと、ありがたいものに聞こえていた。

氷河に生きる水生昆虫

1月23日。両井上(治郎と民二)と伊藤隆の3人は、氷河のさらに上流を、測量を兼ねて見に行く。すぐ上には、数mから、十数mの高さの、急な小山が幾重にも波打ったペニテンテス*の地帯が広がっており、登高は、かなり困難だろう。ぼくは、寺本隊員の調査の手伝いで、氷の結晶写しをやる。できるだけ結晶が大きそうで、表面がつるつとしている壁をえらんで、紙をあてる。そして、鉛筆で紙を塗りつぶすと、氷の単結晶と単結晶の境の線が、くっきりと浮かびあがってくる。これを、氷河を横断しながら、はしから中央部に掛けて取っていく。氷河の端と、まん中あたりで、結晶の大きさがどのように異なるかを調べようというわけだ。青い川が融かした壁で取ったり、氷の滝のそばで取ったり、氷河上の氷と水の折りなすみごとな造形の鑑賞を兼ね、楽しい。

すり鉢形に、3,4m深くなった、とある泉に出あった。底には、青く澄んだ水が見える。その水ぎわの結晶を写しとうろと思つて、底へ、ステップを切って入り込む。ヒヤッとする空気。底は狭く、ほんの50cmほどの幅の泉を、またいで体をささえる。が、深さはかなりあるらしく、濃いブルーの中に、水底は見えない。ふと見ると、水中を1cmほどの黒いものが泳いでいる。1匹だけではない。底の方から浮かび上がってきたり、水ぎわの氷にはい上っていたり。ざっと見て10匹はいる。水生昆虫だ。元来、ぼくは「虫」と名のつくものには生理的嫌悪感を持っており、さわるのも好きではない。が、この時は、直感的に、ドえらいものを発見した気がして、すぐに手にとって見る。日本アルプスの雪渓で見かける、いわゆるセッケイムシにも似ているようでもあり、氷河期の生き残りとして、一時さわがれたトワダカワゲラによく似ているようでもある(図1)。昆虫にはシロウトのぼくにはわからない。とにかく驚きだ。0℃前後の冷たい水の中で、元氣よく泳ぎ

* アンデスなどの乾燥した山岳の氷河や雪面上に、強い日射により形成される針状の局地地形。チリパタゴニアの場合、乾燥した気候ではなく、融水が活発な条件下で形成される表面の険しい凹凸現象に誤用したようである。





図1——氷河上の融氷水の小川に棲む水生昆虫カワゲラ。東京工業大学幸島司郎氏提供。表紙カラー図参照。

氷河昆虫

私たちが見た氷河上の水生昆虫は、その後、1983年に京大パタゴニア氷河調査隊に参加した昆虫生態学者の幸島司郎氏(当時、京大大学院生、現在、東京工大助教授)によって詳しく調査され、昼間は氷河内部の水脈に生息しているが、夜になると表面に上がってきてトビムシ類を捕食していること、氷河上で、雪氷藻類→トビムシ類→カワゲラ類という食物連鎖が成立していることなど、その生態の興味深い実態が明らかにされた。詳細は、幸島司郎: 氷河と昆虫、『山の世界』(梅棹忠夫・山本紀夫編著)、岩波書店(2004)pp.145～154など参照)。

まわっている。いったい何を食べて生きているのか。たとえばヒマラヤのように、土できたく汚れた氷河上なら、土中の有機物ということも考えられる。が、「チリひとつない」という形容があてはまりそうなこの氷河のドまん中で少なくとも眼に見える範囲では、有機物らしいものはない。

とりあえず、ビニール袋に十数匹入れて、キャンプに持ちかえる。偵察から帰ってきた、昆虫生態学志望の井上民二(あだ名「ブンヤ」)に見せると、「ウーン」とうなっていた。さっそく、ぼくが採集した泉に出かけた彼は、その付近の、他の水たまりや小川にも棲息しているのを見つけた。

リソ・パトロン峰

1月24日。久しぶりに晴れてきた。伊藤、ブ

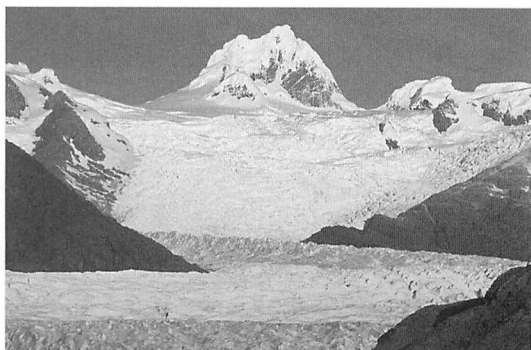


図2——HPS氷河上から見えるリソ・パトロン前衛峰(3018 m)。表紙カラー図参照。

ンヤは、ひと足先に湖岸キャンプへ帰る。25日に、神父が、メリケン粉とジャガイモを補給に来る予定になっている。海岸まで迎えに行かねばならないからだ。

はじめて、HPS10氷河が、その源頭から、雲のヴェールを取りはずした。高さ1500m位の氷陸のはしから、一気に氷瀑(アイスフォール)になって、1000mは落ちている。キャンプから見る限り、とても登れた氷河ではない。たとえ登れ得たとしても、それだけで大仕事だ。調査どころではない。日本で予定していた、「氷河をつたって氷陸(氷床)まで上る」計画は、HPS10氷河に変更したと同時に、破算していたわけだ。前日の3人の上流偵察も、左岸を伝って、やっと、氷河の大屈曲点にたどりついたに過ぎない。氷瀑地帯の下端は、さらに上流だ。が、ある意味では、気が楽になった。じゅうぶん登れる氷河だったとしても、計画が大幅に遅れている現在、とても、氷陸に上がる時間はない。それが、ちっとやそっとでは登れぬとなると、あっさりと末練が消える。

源頭の、氷陸と氷河の境には、障立^{ついたて}のように、どっかりと腰をすえた独立峰が姿を現わした(図2)。こちら側は、スカイラインから、スッパリと切れ落ち、稜線には、巨大な、きのこのかさのような雪庇が、おいおい被さっている。リソ・パトロン山塊の1つのピークだが、ぼくたちは、これこそ、その主峰、リソ・パトロンだと思った。地図では、3018mとなっている。なんだ、3000m級か。日本アルプスと同じではないか、とばかにしてはならない。海拔0mから、急激に3000mだ。第一、緯度が全然違う。雪線(万年雪の限



界)は、900 m 前後だから、千数百 m の山でも、氷河がある。スポーツ・アルピニズムの視点から、高さを絶対視するなら別だが、雪と氷と岩の山として、観賞するぶんには、じゅうぶん、6000～7000 m の山に劣らぬ美しさと厳しさを持っている。

こちら側から見ると、とても登れた山ではない。が、六甲隊*は、このリソ・パトロン峰への登頂も計画している。予定通りいっておれば、もうそろそろ、このピークの近くまで来ているはずだ。かれら、大丈夫かいな。

あとできくと、かれらは、確かにリソ・パトロン峰に登った。しかし、ぼくたちがリソ・パトロン峰だと思っていたのは、実は、主峰の2つとなりの前衛峰だという。主峰は、写真で調べてみると、氷河キャンプから見て、その独立峰の少し右手にある、ゆるやかなピークになる。なんだ、前衛峰の方が、かつこいいじゃないか。かつこはいいが、やっぱり登る山ではなさそうだ。

日本の山なんかクソくらえ！

夕食後は、といっても、たいていは、12時をまわってはいたが、たき火のまわりに集まって、みなで、少しばかりの酒を飲みながら、よもやま話に花を咲かせるのがつねだった。湖岸にひしめく流水のかたまりを持ってきて、小さく割っては、オン・ザ・ロックとしゃれこむ。氷河の氷に、チリのうまい酒、とくれば、申し分ない。コイウエのたき木も、チェーンソーのおかげでふんだんにあり、よく燃える。少々の雨でも、みな、たき火の回りを離れない。チリ・パタゴニアの、ひきもきらぬ雨は、キャンプ生活を始めた当初、隊員をかなり精神的にまいらせた。が、やがて、慣れてしまった。ひとつには、雨の降り方がわかったからだ。サッと降っては、パツと止み、また、サツと降る。次から次に通り雨がやってくる感じだ。本格的な雨は、やはり、日本と同じで、たまに低気圧が通過する時だけだ。その雨も、どしゃ降りなんていうのは、よほど強い低気圧でも来ない限

り、ない。少々の雨でテントに引きこもるより、外で、たき火にあたっている方が、ずっと快適なのだ。

話は、チリや日本に関するもろもろのこと、調査に関すること、趣味に関すること等々、ありとあらゆる、男ばかりで考えられる話題にわたる。が、今になって、よく思い出してみると、意外に多いのが、文明の地から、はるか離れているためにできないこと、やりたくてもできないことへの憧憬だ。中でも、特に、全員の意見がよく一致したものひとつに、映画がある。ぼくたち学生より、一世代古い寺本隊員が、ゲーリー・クーパーを語れば、こちらは、マカロニ・ウェスタンを語る。こんな映画、あんな映画はおもしろかったなあ、というところから、アア、映画が見たいなあ、ということになる。日本から海外へ出た遠征隊員が、日本のスシが食いたいとか、味噌汁がのみたいと思った、ということをよく耳にする。ぼくたちは、こと食べ物に関しては、日本食を懐かしがるということは、ほとんどなかった。が、映画を見たいという気持は、おそらく、他の遠征隊に較べて、かなり強かったに違いない。

また、隊員は、もともと、皆、山好きばかりだ。当然、雑談の中に、日本の山での経験談がよく出る。しかし、ぼくの場合、映画の話のように、北アルプスの××岳へ行きたいなあ、〇〇沢へ帰ったら行こう、などという気持には、とてもならない。ある者は、「北アルプスの剣の稜線、エエなあ。新雪の槍(ヶ岳)は、よかったぞ。よし、帰ったら、絶対××へ行こう」などと、目を輝かせて言っている。まったく、あきれる。確かに、日本の山も楽しい。四季折り折りの楽しさは、ある。しかし、ここは、南米のはて、パタゴニアだ。いったい、なぜ、こんなところまでやってきたのか。日本に、日本の山に飽きたらずにやってきたのではなかったか。ぼくは、チリ・パタゴニアのさまざまな自然にひたりきっているうちに、本当に、日本の山登りが、ばかくなっていたところだった。こんな未踏の、未知の自然の中で、日本の、あらゆる意味でこせこせした山登りに郷愁を感じるなんて、理屈ぬきに、悲しいではないか。日本の山なんて、クソくらえだ。

* 私たちと一緒にプエルトエデンに入った六甲学院山岳登山隊。



食糧計画の問題

1月26日、伊藤、ブンヤが、氷河キャンプへ上がってきた。全員で、湖岸キャンプへ撤収だ。

食糧係の伊藤が、残った食糧を調べているうちに、急に怒りだした。数kgはあった豚のもも肉のくん製の塊りが、相当に減っているという。これは、主にぼくの仕業だった。氷河に残ってから、久しぶりの肉だ、というわけで、残った2人をそそのかして、かなり景気よく食ったからだ。が、ぼくには、ぼくの言い分もあった。

「自分たちで苦勞して運んだ食糧を食って、なぜ悪い。氷河に運んだのは、氷河で食うためだろ」と、伊藤食糧係は反論する。「いや、この肉は、エデンに帰ってからの、後半用の肉だ」と。なんだって、ここで食ってはいけないのもまで、苦勞して氷河まで運ばせるとは、何ごとだ。ただでさえ、ボッカにあれほど苦勞したのに、伊藤は、できるだけ涼しいところに置いていたほうが、あとまでもつと思ったからだ、と反論する。

この論争は、ぼくたちの遠征隊の食糧に関する問題点を、集約した形で表わしていた。

日本で食糧計画を考え合った時、多くの遠征隊の食糧計画とは、かなり違う方式を打ち出していた。まず、隊の行動形式が、ひとつのベース・キャンプを中心に動く形式だったので、登山隊が必ず用いるレーション方式(食糧を、1日分、あるいは1食分ごとにあらかじめ分けて包装しておく方式)は取る必要がなかった。レーション方式は、料理する楽しみから見ると、まことに味気のないものである。料理する楽しみは、また食べる楽しみでもある。ふんだんに燃料もあり、固定したかまどもできるということもあり、いわば、どんぶり勘定方式にした。キャンプで、1カ月なら1カ月に、何が、どの位いるかというのを計算して用意しておくやり方だ。その場合でも、隊員の好みや行動計画に従って、ものの用意の仕方がそれぞれ違うのは当然だ。ぼくたちの場合、ちょっと変わったことを考えていた。

まず、日本から持参するもの。最近では、日本でしかえにくいもの以外は、すべて現地購入というのは、遠征隊の常識になっている。ぼくたちも、

それにならった。緑茶、乾燥めん類、インスタントみそ汁、しょう油、味の素等の調味料、乾燥野菜、つけもの、等に限った。緑茶、めん類は、いずれも、宇治や奈良のしにせまで行ってもらったもので、よいものだった。日本にしかないものといえは、インスタントラーメンがあるが、わざわざパタゴニアまで来て、下宿のわびしい味を思い出すこともあるまいということで、これはやめにした。が、なんといっても調味料だ。日本的調味料は、こりにこって、細々と持っていく。しょう油、味の素から、七味とうがらし、粉わさび、2,3種類の日本的ソース、はては、京都のうまいギョーザ屋のラー油等々。日本の調味料さえあれば、外国のどんな材料を使おうと、日本の味に上げることができる。たとえば、エデンでは、粉わさびと、しょう油のおかげで、ロバロというパタゴニアの魚を、さっそく刺し身にして食うことができた。

現地チリでの購入食糧は、ひとつの試みとして、肉をできるかぎり、といっても、週に1度か2度は主食にする、間食としてのクラッカー、ビスケット類は値段が高くて、しかもかさばるので極力避け、そのかわり、メリケン粉を持って行ってパンを焼く、ということにしていた。

が、この試みは、いずれもうまくいかなかった。まず、肉食主義だが、チリは羊肉がとても安いときいていた。確かに高くはないが、くん製やハムになると、やはり値がはる。なま肉はもたない。食糧購入費が、現地に来てから減らされたこともあって、主食として肉を食うという隊員一同の夢ははかなく消えた。羊を1頭生きたまま連れていくという妙案があったが、誰が殺すかという話になって、たち消えとなった。パンの方は、ベース・キャンプを作ってからしばらくは、伊藤ベーカーの奮闘でうまく行ったが、やっぱり時間がかかる。作ってくれたパンがまたうまずぎて、2回分を1回で食ってしまうなどということもあった。けっきょく、チャパティ式に味けなく焼くということになった。

どんぶり勘定方式は、ほかの点からもやりにくくなっていた。「アギラ」号で運んでいるうちに、肉の一部はネズミに食われ、野菜や果物も、腐っ



たり、カビが生えたり、しおれたりしたものが多かった。くさりかけたバナナは、校長先生夫人ベルタおばさんがもらいうけ、付近のアラカルーフの子供たちに、食べられそうなところをとってやっていた。バナナなんか、ほとんど口に入らないのだろう。プエルトエデンでは、ネコが肉をねらい、人間が野菜をねらっていた。人間といっても、空軍の炊事係氏だ。もとより新鮮な野菜の乏しいエデンだ。空軍観測所の食糧庫には、持ちのいいニンジン、玉ネギ、ジャガイモ位しかない。そこへ、伊藤は気をきかせて、トマト、ネギ、カボチャ、三つ葉、レモンなども持ちこんでいた。炊事係マテオ氏は、皿にトマト等をいくつか取って、伊藤に向かって、「ネッ、いいだろう」と言わんばかりにウィンクする。そんなことが、2回も3回もあり、伊藤は、エデンにいる間、ユーウツそうな顔をしていた。そんなわけで、ドンブリ勘定の前半計画の1カ月分も少なからず減っていた。また、エデンに戻ってからの後半計画用の大切な食糧、例えば肉製品も、失くならないように、わざわざエデンを離さねばならなかった。

1カ月のドンブリ勘定だから、やっぱり、はじめのうちに好きなものを食ってしまう傾向がある。肉なんか特にそうだ。途中、神父にジャガイモの補給をしてもらったのも、ジャガイモのゆでたのが、意外に主食として簡単でうまく、消費が激しかったからだ。おかげで、終わり頃になると、毎日毎日豆を食わざるをえなくなった。うまくバランスするように管理するのが食糧係の役目だが、1カ月分はやはりちとしんどかった。せめて1週間分ずつ位、食糧を支分けておくべきだった。

肉類が乏しくなった折に、後半用の肉を氷河まで運ばされ、……。伊藤との論争は起こるべくして起こったものといえよう。

探検は作業ではない

1月29日。北東風、即ち HPS10 氷河の方から湖面をわたってくる風が強い。雨も降りだしてきた。が、休んでいるわけにはいかない。残されていた仕事、湖岸キャンプの背後に2列に平行に並ぶモレーン丘の測量を済まさねばならない。

伊藤、ブンヤ、ぼくの3人で、トランシット、^{けん}間縄、測量用ポールを持って、風雨の中で測量を始めた。エカウク湖から、モレーン丘、大湿原に至る地形のプロファイルを作るのが目的だ。トランシットをのぞいて直線を定め、間縄をのばし、土地の小さな起伏の間かくを測っていく。湖岸の背後には、岸にほぼ平行に、高さ数十mのモレーン丘が横たわっているが、そこに行くまでの平坦な草地にも、2,3mの小さなモレーンがいくつか並んでいる。モレーンの大きさ、モレーン間の距離を測って、かつての氷河の伸縮、ひいては気候変動にまで考証を加えようというわけだ。

が、測量は早くも困難になってきた。地形の起伏や生えている木のため、直線をとることができない。モレーン丘の斜面にかかって、絶望的となった。モレーン丘には十数mのコイウエの木が森をなし、密生した下生えのやぶこぎの中で、とても縄を持って直線に進むことなど不可能だ。トランシットでポールをのぞいても、森林の中で、まったく見えない。それに加えて、冷たい風雨はやる気をなくさせる。ばかりしくなる。モレーン丘にはい上ってから3人で衆議一決、測量はやめることにした。ひとつには、ここから大湿原まで続く森林と沼沢地で、トランシットと間縄、ポールによる測量はやっても意味がないということがあった。もうひとつには、まったく気持の問題として、いやになったのだ。いやいやながらやる仕事なんかろくなことはできない。かわりに、写真撮りと、植物、とくに木本科の下生えを観察して歩こう。とたんに気が楽になる。

2つのモレーン丘の間は沼沢地になっている。尾瀬ヶ原の規模を小さくした感じだ。平行にらんでいると思っていた2つのモレーン丘は、まん中あたりで低い尾根でつながっている。その尾根により、沼沢地も2つに分かれている。向かって右手の小さな方には、よくパト(野鴨)が群れ遊んでいるので、パト湖とブンヤが名づけた。まわりを密林に囲まれた、静かな池は、パトにとってこのうえない憩いの場であろう。ちなみに、このエカウク湖一帯、いやチリ・パタゴニア一帯には、どう猛な獣はほとんどいない。陸上哺乳動物では、野生のシカ(Huemul)が最も大きな類だ。





図3——モレーン丘の森の中の小さな泉。伊藤隆氏撮影。

ぼくたちは、このしかには1回もお目にかかることはできなかった。ただ1回だけネコの鳴き声のようなものを湖岸キャンプで聞いた。が、シカどうかは怪しい。それ以外にも、動物らしい動物にはほとんど出くわさなかった。昆虫もたいしておらず、虫きちがいのブンヤを残念がらせた。が、鳥類はかなりいる。水鳥のパトは、ふつうはフィヨルドの海ではしょつ中見かけるが、海岸から奥まった湖や沼沢地で見かけることは少ない。このパト湖は例外の部類だ。エカウク湖には、1カ月の滞在期間、まったく水鳥は見かけなかった。水鳥以外の鳥で、とくに珍しいものとして、湿原でピカフローレ(*Picaflores*)、即ちハチドリを見た。ピカフローレ(南米全体に、さまざまな種類が分布する)は、まるでハチのように羽根をふるわせて空中にとどまることができ、長いくちばしで花のみつを吸う。

沼沢地に降りて、まわりを水に囲まれた小さな島のようなところでひと休みする。細かい雨は水面にいくつもの輪をつくる。コイウエのひょろひょろとした木が、沼沢地を遠まわりに囲んでいる。静かだ。久しぶりに調査や測量ぬきの、生身のパタゴニアに浸っている自分に気がつく。ぼくはパタゴニアの自然と戦うことを、あるいは、自然を冷静に調査することを第一の目的にして、やってきたのではない。まさに浸りにきたのだ。どんなに立派な調査をなしえても、どんなに未踏ルートを決めることができて、今の気分を忘れたら、探検なんてぼくにとって意味はない。

再び立ちあがり、水をさけながら道を取り、対



図4——でっかいカメラを持ったまま木登りする井上民二(ブンヤ)隊員。伊藤隆氏撮影。

岸のモレーン丘の斜面に取りつく。このモレーン丘のむこうは、大湿原になる。広い尾根の森をさまよううちに、小さな泉を見つけた(図3)。コイウエの高木にとりかこまれて、ひっそりとある。直径数m、まわりは、幅2m位の水草と苔で縁どりされている。縁どりの部分は水に浮いているらしく、片足を乗せるとフワフワ動く。濃く澄んだ水に、泉のまわりの林がおおいかなぶさるように、はじめは水面に揺れながら、次第に定まりながらくっきりと映ってきた。雨はやんできた。幼い頃のおとぎの国の話を思い出す。この泉も、やがては木や枯れ葉が堆積してなくなってしまうだろう。

ブンヤは木に登って大湿原をのぞき見る。6×9の大きなマミヤ6と一眼レフを首にかけて、まるでカメラの木登りだ(図4)。やがて、通いなれた海岸と湖岸キャンプを結ぶ道に出た。ゆっくりと木本科の植物の写真を撮りながら引き返す。ひとつひとつ記述し、写真を撮る。おもしろい。なんとこんな植物もあったかと思うほど出てくる。キャンプまでの短い間にざっと20種はある。調査と測量をはじめてから、ノートに数字ばかり書きこむ作業が続けていた。そんなことをやっているうちに、この氷河と湖と湿原、森林の自然を何とも感じなくなっていた。単に、何かを測るという目でしか見なくなっていた。いや、さらに未知だらけの自然だという認識も失いかけていた。キャンプをつくったころは、すべてが珍しく、何でもかんでも好奇の目をむけた。が、そのうちに、すべてがあたり前になってくる。10年も前から



湖面水位の変動

静振(セイシ)とは、Seicheの和訳。湖面(水位)の固有振動で、洗面器の水でたとえれば、器の大きさと水の量で決まる揺れのこと。静振の周期(T)は湖の代表的な大きさと深さによって決まり、最も卓越する振動周期は、 $T=2L/\sqrt{gH}$ となる。ここで、 L は湖の長さ、 g は重力加速度(9.8m/s^2)、 H は湖の平均水深。エカウク湖の場合、大きさは直径約2kmなので、水面振動を測定すれば平均的な水深がわかることになる。結果は、湖に浮く大量の流水が湖から川への出口を間歇的に塞ぐ効果による湖面振動の振幅が静振よりもはるかに大きく、静振の精確な測定には至らなかった。しかし、湖に浮かぶ流水群が水位変動を引き起こしているという新しい事実を見出すことができた。

そこに住んでいるような気になってくる。朝起きてメシを食って、何となく決まっているスケジュールを済ませ、またメシを食って寝る。

ぼくは、フト、中学生の時読んで、無茶苦茶感動した、西堀栄三郎博士の『南極越冬記』(岩波新書)の一節を思い出した。

その一節で、多くの隊員が昭和基地でマージャンに明け暮れている様子を見て、「せっかくこんな宝の山へ入って、何でも調べたらおもしろいことが山のようにあるのに、ガチャガチャと、それもマージャンばかりして、せっかくの一世一代のチャンスを消費してしまう」と嘆いておられる。ぼくも、読んだ時は、なんで南極まで行ってマージャンをやるのか、もったいない気がして、理解できなかった。が、今、はたとわかった。南極だって、パタゴニアだって、ニューギニアだって、あるいはニューヨークだって、同じなのだ。よその土地へ行くと、はじめはすべてが珍しい。が、やがて居すわりだすと、すべてが当たり前になってしまう。なんとなく、そこの日常性に慣れてしまうのだ。はるばる地球の裏までやって来て、日本にない氷河、植物、動物、異民族の文化を見ても、はじめは珍しくもあり、驚きもすれ、すぐ何ともなくなる。これは、探検にとっても、科学にとっても、恐ろしいことだ。人間のうちに含まれる、どうしようもないほど強い日常感覚。戦争はいや

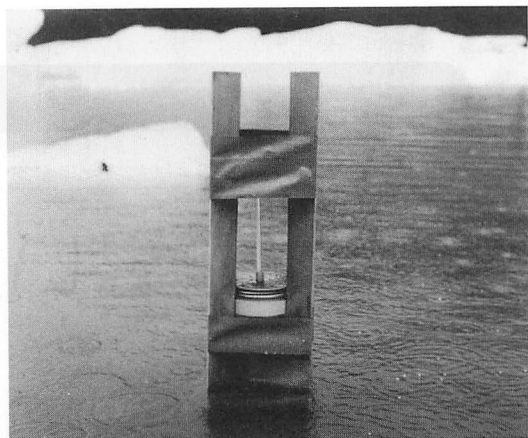


図5——伊藤隆隊員お手製の静振観測装置。伊藤隆氏撮影。

だと、戦争のない時は思っている、いざ国が戦争状態になると、「お国のために」戦うのだと思ってしまう感覚も、大いに共通するものがある。探検は、未知未踏の地へ行けばそれで済むことにはならない。常に何らかの高い問題意識——例えば、日本とはいかに違った世界であるか——を保っていなければ、どこに行こうと、得るものは少ない。調査を味けなくしつつあったのは、いったい何のため、何を知りたいがための調査か、という意識がうすれかかっていたからのようだ。探検は作業ではない。つねに日常感覚を打ち破るものでなければならないのだ。マンネリ化した測量をやめて、ブラブラ歩き回り、植物を改めて観察したことは、大きな意義があった。

キャンプに帰ってからは、湖から川への落ち口で流量調査をやる。川の断面積は、すでに音響測深器で測ってある。あとは、物を流して流速を測ればよい。水面を流されるものと、川の流速は少し違うことが問題になる。

伊藤は、空かんとビニール管で、湖の静振^{セイシ}の測定器を作った(図5)。静振とは、湖の大きさと深さで決まる湖面水位の固有振動数のことだ。静振が出れば、エカウク湖の平均深度が出せる(左欄コラム参照)。

湖岸キャンプを去る日も近い。調べ残してあることは、できるだけやっておこう。

今日は寺本隊員の誕生日だ。これにかこつけて、伊藤食糧係を懐柔する。レンズ豆にインゲン豆と肉を加えたスープ、焼き肉、果物のかん詰。あとはコーヒーとアルコール。結構でした。

